

平城京右京一条二坊四坪の調査

—第588次

1 はじめに

本調査は、奈文研本庁舎建設とともに確認調査である。本庁舎への配管工事に先立ち、遺構の遺存状況を確認すべく東西6m、南北7m、面積42m²を調査した。調査期間は2017年6月5日から6月15日である。

奈文研本庁舎地区の建物部分については、2014年度に約3600m²におよぶ発掘調査（第530次調査）をおこない、一条南大路や西一坊大路などの遺構を検出した。これを受け、新庁舎の大幅な計画変更をおこない、2015年度に追加の発掘調査（第546次調査、第560次調査）を実施した。本調査区は、第546次調査区北辺西端および第560次調査区東北端と一部重複する位置にあたる。

2 基本層序

基本層序は、現地表から、表土（約10cm）、攪乱土（約65cm）、水田床土（約15cm）、旧耕土（約10cm）、橙灰褐色砂質土（遺物包含層、約10cm）、黄灰白色粘土（平安時代整地土、約5cm）、暗灰色もしくは黒褐色粘土（奈良時代整地土、約20cm）、黄白色粘土・黒褐色粘土（地山）である。

3 検出遺構

平安時代の遺構

柱穴および小穴を14基を検出した（図255・258）。遺構検出面の標高は68.9～69.0mである。柱穴および小穴の平面形は方形と円形があり、いずれも直径0.2～0.4m程



図255 第588次調査区全景（南東から）

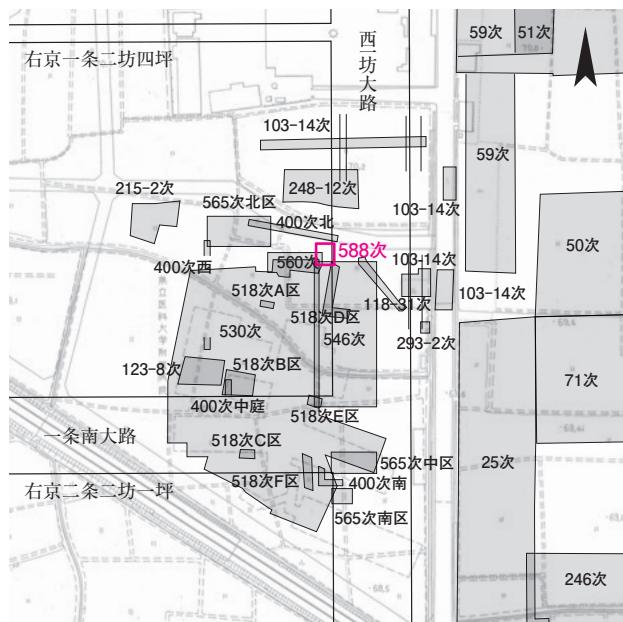


図256 第588次調査区位置図 1:3000

度、深さ0.05～0.3m程度である。埋土には灰褐色砂質土が多く見られた。このうちSP3451～3453は、それぞれ調査区南の第546次調査で検出したSB3252～3254を構成する柱穴の可能性がある。

柱穴SP3451 調査区東辺で検出した一辺0.3m、深さ0.42mの不定形の柱穴（図257）。

柱穴SP3452 調査区中央部で検出した一辺0.3m、深さ0.62mの円形の柱穴。

柱穴SP3453 調査区西部で検出した一辺0.3m、深さ0.43mの方形の柱穴。

奈良時代の遺構

東西溝1条、小穴2基を検出した。遺構検出面の標高は約68.9mである。

東西溝SD3454 調査区東半中央部で検出した東西溝。幅約1.1m、長さ約2.4m分を検出した（図258・259）。調査区中央部でとぎれており、西には続かない。深さは、今



図257 柱穴SP3451断面（北から）

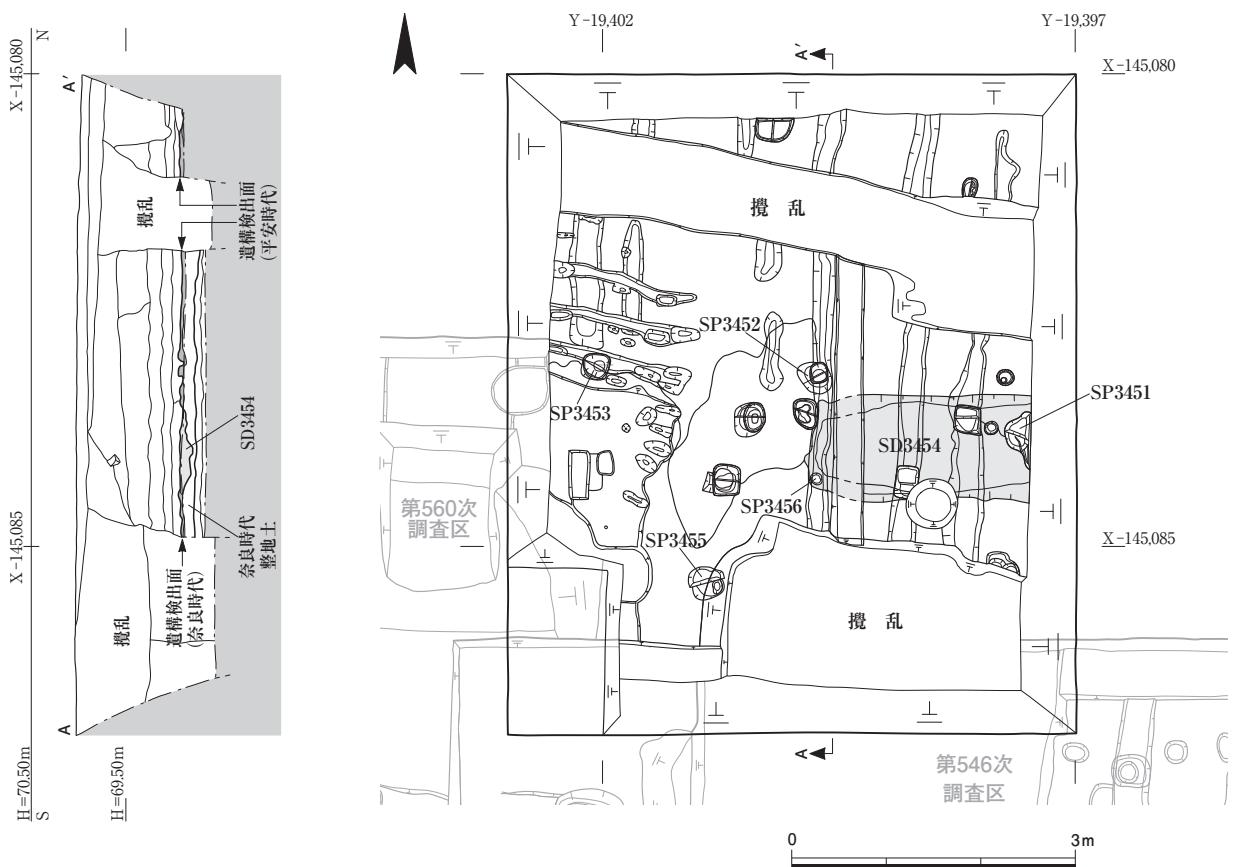


図258 第588次遺構図・土層図 1:80

回検出した部分の東端で0.25m、西端付近で0.1mであり、東に向かって傾斜している。溝内には特徴的な橙褐色砂質土が堆積しており、埋土内から奈良時代と思われる土器片が少量出土した。

小穴SP3455 調査区南西部で検出した小穴。平面円形を呈し、直径約0.3m、深さ約0.15mである。

小穴SP3456 調査区中央部で検出した小穴。直径約0.2m、深さ約0.1mで、東西溝SD3454底面で検出した。



図259 SD3454堆積状況 (西から)

4 出土遺物

出土遺物は、須恵器・土師器・黒色土器の細片および丸瓦・平瓦の細片のみ少量出土した。

5 まとめ

今回の調査では、平安時代の柱穴及び小穴14基と奈良時代の東西溝1条および小穴2基を検出した。平安時代の柱穴3基は、調査区南の第546次調査で部分的に確認した建物SB3252~3254の柱穴と一連である可能性がある。奈良時代の東西溝SD3454は、坪内の排水施設と考えられ、東に向かって傾斜している。このことから、調査区東2mに位置する西一坊大路の西側溝に流れ込んでいたと推測できる。築地の痕跡は確認できていないが、その部分の暗渠の可能性があろう。坪内の土地利用を考える上で貴重な所見を得ることができた。

なお、検出したすべての遺構を保存するため、施工はこれらの遺構を避けるかたちでおこなわれた。

(山藤正敏)